

筆の里工房周辺整備に関する事業概要書

1 筆の里工房周辺整備コンセプト

熊野町の持続的なまちづくりの推進に向け、本町が世界に誇る伝統的工芸品である『熊野筆』の芸術・文化を国内外に発信するとともに、本町の「食」、「自然」、「人」などの魅力を体感できる場として、また、筆の歴史等を知ることができる文化施設「筆の里工房」に隣接している強みを活かし、『筆』の体験交流施設を核とした公園空間、地域活力を創造する施設を備えた観光交流拠点公園を整備することで、交流人口の拡大、地域活力の向上を図るため、以下のコンセプトを基に事業を推進しています。

1. 『町民と共に、持続的に』創る

第6次熊野町総合計画において、目指すまちの姿として『ひと まち 育む 筆の都 熊野』を掲げ、町民との共生による信頼と連携を基本に持続的なまちづくりを進め『なんかいい』『ちょうどいい』と想える「熊野」を目指しており、『町民と共に、持続的に』創っていくエリア（＝『自分たちが関わっている』という実感を『地域貢献＋楽しみ』の形で実現していくこと）を目指す。

2. 町民が利用し、くらしを豊かにする

『集客・観光』の視点に留まらず、町民が利用し、非日常的な体験により、町民自身が新しい自分を再発見する一助となるエリアを目指す。

3. 創作活動を通じた持続的なまちづくり

熊野で創られ、熊野を代表する「熊野筆」は、筆の里工房と隣接しているという立地関係も含め、『熊野町らしさ』を表現し、オリジナリティ（差別化）、ここにある必然性／関係性を形成する重要な要素である。また、「熊野筆」による『熊野らしさ』には、筆による創作物である『書』や『絵』や『化粧』、これらが紡ぐ【文化】【アート】という要素が重要な役割を果たしている。産業として、またこれら【文化】【アート】という要素も含め、持続的に発展させるためには、熊野発で筆の新たな可能性を発信していくことも重要である。

その一方で、町民の利用シーンを増やし、活用・参加し易い場とするためには、筆に限定せず食や身近なモノも含める必要がある。広く『表現の場、体験の場』を『創作活動』と捉え、『創作活動』による持続的なまちづくりをキーコンセプトの1つとする。

4. 自然・くらし・文化（周辺環境）との調和

熊野町の『なんかいい』『ちょうどいい』、熊野町らしさの重要な要素となる自然環境について、整備エリア周辺の自然環境との調和、利活用をもう1つのキーコンセプトとする。

※上記3と合わせ、インドアとアウトドアの融合を図る。

5. 自由度のある施設

変化が激しい時流を考慮し、熊野の魅力を引き出しながら、時代に合わせて変わっていきける自由度のあるエリアデザインを目指す。

6. いつまでも留まりたくなるような空間

全国的に言われているニーズの多様化だけでなく、長年、近隣都市を中心に移住者を受け入れ続けたこともあり、町民ニーズも多様化しており、イベントや物販などに頼ることなく、どんな人でもそれぞれにとって心安らぐ空間づくりを目指す。

2 整備スケジュール

整備項目	年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度
体験交流施設設計		→						
体験交流施設建築			→					
調整池整備					→			
駐車場整備						→		
北側広場整備							→	

3 目標利用人数（別紙のとおり）

4 体験交流施設概要

体験交流施設の設計は、公募型プロポーザル方式により選定された「環境デザイン機構・角建築研究室設計共同体」と令和4年10月から令和5年度にかけて設計を進めています。

体験交流施設の設計方針は、資料2のとおりです。

目標利用人数

(単位：人)

	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11
筆の里工房	33,979	31,391	60,000	60,000	65,000	70,000	70,000	75,000	75,000	80,000
体験交流施設							30,000	35,000	40,000	45,000
公園（北側広場）										55,000
	33,979	31,391	60,000	60,000	65,000	70,000	100,000	110,000	115,000	180,000

【数的根拠】

※重複人数

- ・筆の里工房における令和4年度以降の目標人数は、第6次熊野町総合計画のKPIとする。R7:7万人、R12:8万人
- ・熊野町観光交流拠点整備構想計画(H28)における筆の里工房周辺整備による目標人数は15万人（町内3万人、町外12万人）
- ・公園の推定利用者数は、令和3年度都市公園利用実態調査報告書の基に算出